



*One And Only*

*Mai Sekitoh*

『もっとあっさりしたもの、なんかない？』　と言われたのが始まりだった。

エディが働くバー、ジェイディッドハートでは、残念ながら冷凍食品のフライドチキンやポテトなど、簡単なスナックしか置いてない。あとは、付け合せに使うレタスぐらいのものだった。

思い立ったエディは、フライドチキンの身をほぐし、レタスとパルメザンチーズ、マヨネーズで、簡単にシーザーサラダを作って、店の常連だというその男に出した。

この店にバーテンとして雇われてまだ数ヶ月。いつも黒か白しか着ないので、エディはいつしか常連客の一部から、ミスター・ブラック・アンド・ホワイトとも呼ばれるようになっていく。肩よりも長いカールがかかった黒髪に、黒目がちのダークブラウンの瞳、かつてスポーツをしていた事をうかがわせる下半身に比べ、なで肩に肉付きの薄い上半身は、30歳も越えたというのに、未だに少女じみて見える顔立ちの印象を強めるだけだった。

この店の店長は既にエディの働きを信頼し、開店後しばらくしなければ、店には現れない。エディが勝手に判断して出したメニューも、『任せる』の一言で、店の裏メニューに決まってしまった。以前付き合っていたジェフの世話もあり、料理をまめに作っていたのがこんな所で役に立つとは、エディも思っていなかった。

適当に作られていた裏メニューは、やがてエディの持ち込み食材も含まれるようになり、正式なメニューに盛り込まれるまで、さほど時間を要しなかった。今では、この限界で珍しく食べ物があるバーとして、男性ばかりを対象とする通りを頻繁に訪れる客たちに知られるようになった。

「もう、そんな時間かよ」

常連の1人が眠そうな声をあげた。閉店時間の店内に、客はその男しかいない。半ば居眠りしながらグラスを傾けていた所を、目を覚まさせるために、エディが肩を軽く揺すったのだ。

エディは、つい最近まで彼の名前を知らなかった。それまでは自分の中で『シーザーサラダ』と名づけていた。最初に、あっさりしたものはないか、と聞いてきたのが、この男だったからだ。メニューにない、と断ったのだが、何か作ってくれ、と頼んできた。以来、エディの中で彼は『シーザーサラダ』だった。

シーザーサラダは、黒っぽいブラウンヘアに同じくブラウンの目、見た目はまるで大型のイヌ科のようだった。

「そろそろ、ちゃんと起きて出てってくれないか。閉店なんだ。もう、あんたしか残ってないよ」

「ん？分かってる・・・」

体を起こしたシーザーサラダはエディの肩に腕を回し、それを支えにスツールから立ち上がろうとしていた。彼は、エディよりも遥かに筋肉質で上背もある。エディはふらつきながら、テーブルに手をつけて、シーザーサラダを支えた。なんとか立ち上がったシーザーサラダの手は、肩からエディの腰へ、そして、ある意図をもって尻の方へと下がって来た。「ちょっと、何する・・・」

「いい尻だな」

「俺の尻なんて、どうでもいいから」

起き上がったシーザーサラダは、テーブルに片手をつけているものの、もう一方の手をエディの尻から離そうしない。

「手を離せよ」

「前にも、こんな尻の持ち主がいたんだよ。ナンパしたけど、相手が一緒だったみたいで、フラれたんだよな」

「ジョージ！」 カウンターの中から助け舟が出された。店長のドンである。ジョージと変わらぬ背の高さ、うっすらとついた筋肉が、バランスの良い骨格にのった美丈夫だった。優美な印象を与えるのは、砂色のロングヘアに囲まれた北欧系の顔立ちに、細い鼻梁ととがった鼻先、明るいブルーの瞳という見た目のためであろう。

「うちのバーテンダーをナンパするのは止めてくれないか。客同士なら勝手にやってくれればいいが、スタッフはやめろ。第一、彼にも相手がいるぞ」

「なんだ、ドン。なら、お前ならいいのか？おっさんが怒ってくるだろうかな」

ドンは、苦虫を噛み潰したような顔で、シーザーサラダこと、ジョージを見ている。

「で、ジョージ。いい加減、俺の尻から手を離してくれないか」

エディは初めてシーザーサラダを名前で呼んだ。

「ケチだな。いいじゃないか、尻ぐらい。減るもんじゃなし」

エディに再度手首を掴まれ、ジョージは渋々手を離した。やっと体をまともに起こした彼は、エディを改めて仔細見聞するように眺めた。

「うん。あの時一緒に踊った奴と同じぐらいいい尻だ」

「お前は人間の尻しか覚ええないのか」

「酔っ払ってたし、暗かったからな。声かけたのも、尻を見たからだし、あとは、あの時掴んだ感触ぐらいしか覚えてねえよ」

ドンは呆れたようにため息をついた。そのドンに話題が移ったのをいいことに、エディはジョージの元から離れてカウンターの中に戻った。

店では、閉店間際、くだを巻いている客、ジョージのように半分居眠りながらも、まだ酒を飲み続ける客、と、ほぼ毎日のように誰かがねばっている。追い出すのも閉店準備の一つだった。早くこういう客を追い出せるかどうかで、仕事が終われる時間が変わって来る。時給が変わる所ではした金である。もう真夜中過ぎであり、腹も減っている。早く帰って軽く食べたらとっとと寝たいのだ。しかも、今夜は付き合っただけで半年足らずのジェレミーがエディの帰りを待っている。多少遅くなろうが、彼はエディを責めることは決してしないが、早く会いたいという気持ちがエディの動きをいつもより俊敏にさせる。

「んじゃ、またな。 ミスター・ブラック・アンド・ホワイト」

「まいど」

エディは顔だけ上げて、ジョージに挨拶し、カウンター内の清掃を続けた。明日からジョージのことを『バット・マン(けつ男)』と呼ぼう、と思いながら。

早くジェレミーのアパートに行って、2人分の軽い夕食を作らねば。ジェレミーは料理がからっきしなのだから。

エディは片付けの手を早めた。

夕食とはいえ真夜中のこと、軽く腹が膨れる程度の軽食だ。

時間もかけずに出来るもの、ということで、今夜は、以前作って冷凍しておいたトルティーヤを解凍し、サルサとワカモレを作って、ビールで流し込むだけの、簡単なものだ。

食卓の話題は、ほとんどその日にあったことぐらいで、今日見かけた酔客の話や、休みの日に見に行ってみたい美術展や、レンタルしたDVDを見たりで、明け方になってしまう。

決して広いとは言えないキッチンで洗い物をしていると、背後からジェレミーが抱きしめてきた。6フィート足らずとはいえ、エディより僅かに高い。体格も遥かにがっしりとしている。そうして抱きしめられると、何とも言えない安心感を感じるようになったのは、ここ最近の話だった。

エディは軽く笑って、自分の首に回ったジェレミーの腕に口づけた。挨拶を返すように、ジェレミーもエディの頬にキスしてくる。片方の手が、肩から胸元へ、やがて腰へと下がる。そのいたずらな手が下肢を支える双丘へ伸び、指がまさぐる。

「だめだって、ジェレミー。もう少し待ってくれよ」

「少しって、どのぐらい？」

とがめるエディの声も、尋ねるジェレミーの声も笑っている。普段はともすれば酷薄に見えるジェレミーのアイスブルーの瞳が、欲望に潤んで見えた。

2人とも夜の仕事のため、昼夜逆転の生活だった。それゆえ、会うのもしょっちゅうという訳にはいかない。同じだけの時間を働いていても、夜型生活は、体にかかる負担は大きい。無理をしないという事を、2人は自分達に課していた。しかし、会えない時間の長さは、相手に感じる欲望を強める要素となり得る。ことに、ジェレミーには。

エディは、ジェレミーと付き合う直前に、恋人の死を経験している。その死に自責の念を感じていたところを口説き落とされたのが、死んだエディの恋人と同じ、ダークヘアに、アイスブルーの目をしたジェレミーだった。亡くなった男の面影を重ねてしまうのでは、と躊躇していたのを、それでも構わない、と粘った結果によるものだ。

ジェレミーの熱の入れようは、放っておくとエディがどこかに行ってしまうような不安を払拭しようとするかのようなものだった。

皿の最後の1枚を籠にあげると、エディは振り返り、ジェレミーと正面から見合った。

「お待たせ」 笑顔で、ジェレミーの首に両腕を回した。

唇が重なり合うと、どちらともなく、舌を伸ばして絡めあった。その動きと連動するかのようになり、手が互いの下肢に伸び、熱を帯びたそこをまさぐりあう。

ベッドに倒れこむ前から既に感じていた欲望に、体は正直だった。触れるまでもなく硬さを増していたそれは、相手の手で、爆発寸前まで高められる。合わせた唇からは、吐息というには荒い息が漏れ、口づけは、相手をまるで自分の中に取り込んでしまおうとでもするように深いものになる。空いた腕すら、相手を強く抱きしめ、肩を、背中をさまよう。

エディの着ていた黒いシャツは、とうにジェレミーに剥ぎ取られていた。ふいに体を離れたジェレミーが、慌ただしく自分のシャツもジーンズも脱ぎにかかった。同時にエディも、まだ身につけていたジーンズと靴を、着ていたこと自体がじれったいかのように脱いでしまう。

再び抱き合うと、待ちきれないように、ジェレミーがエディの下肢を抱え上げる。エディも両腕を伸ばして、ジェレミーの体を受け止める。エディが数秒の衝撃を受け止めた後、先に声をあげたのは、ジェレミーだった。まるで、エディを自分の腕の中に抱きとめたことに安堵したかのように。追って、エディの切なげな吐息混じりの声。

お互いを取り込もうとする口づけが、再開された。

「あっちのボックスに移ってもいいか？ 混んできたらカウンターに戻るからさ」

やって来たジョージがエディにお伺いをたてる。店はまだナイトクラブの客が来るには早く、閑散としている。断る理由はなかった。

「いいよ。でも、もうちょっとしたら、多分客が増えるから、それまでで良けりゃ」

「了解」

火のついた煙草を指に挟んだまま、テキーラの入ったグラスを持ち、ジョージは店の奥にあるボックス席に移っていった。

珍しいものだ、とエディは思った。ジョージはドンのお古からの知り合い、ということもあって、1人の時は、必ずカウンターにしか座らない。少なくとも、エディがここで働くようになってから、ずっとそうだった。

銀細工の販売店を営んでいるというジョージは、店がひけたあと、今日のように比較的早い時間帯に来る。先日のように遅い時間に来るのは、大体が休みの前日で、ゆっくり食事を取ってからなのだという。ドンなどは、ジョージが遅い時間に来たのを見て、『もう1週間たったのか』と、日付を確認しているぐらいだった。

このジョージの珍しい行動の理由は、すぐに判明した。

「ブラック・アンド・ホワイト！」 ジョージに呼ばれた。エディの名前は知っているはずだが、そう呼ぶ客も少なくないので、エディも逐一否定するのはやめた。

「なに？」

返事をしながら、エディはカウンターを出て、ボックス席に行った。呼ばれる程度なら聞き取れるが、注文など細かなことは、音楽で邪魔されて、席まで行かなければ聞こえないのだ。それが面倒だったので、ジョージがそこに座る、と言いだしたのも、あまり良い気はしなかったのだが、いざ客で埋まるとすると、断るのも面倒だったのだ。

「タコスと、テキーラのロックおかわり」 空いたグラスが差し出される。

エディは黙ってうなずくと踵を返した、が、また尻を掴まれた。

「ちょっと、ジョージ！ 俺はストリップバーの女じゃないんだから」

「いやあ、やっぱり、いい尻してるよ」

「だからって、触るなよ。あんた、まさか、この為にカウンターじゃなくて、この席に移ったんじゃないんだろうな」

「背もたれのある椅子に座りたかっただけだぜ？」

「本当かよ・・・」

呆れてため息をもらしながら、カウンターに戻る。

大体、エディが声をかけられるのは、尻から脚にかけてを褒められて、というケースが多かった。この店で働き出してからは、拘束されている時間帯のせいか殆どなくなったが、以前、昼間の仕事をしていた頃は、時々あった。この界限に出入りする事は滅多になかったもので、そう頻繁ではなかったが。最後に来たのは、仕事以外では、恐らく1年近く前のことだろう。死んだ恋人が、『そういう場所』に行ってみたい、というので、一緒にクラブに行ったことがあった。その時、ダンスフロアに出た時、確かにジョージと同じような男がいた。やはりエディより数インチ背が高く、恐らくダークヘア。抱きしめるように腰を捕まえられ、尻を掴んできて言ったのだ。『そんな可愛

い尻、見せつけるほうが悪い』と。店の中が暗かったので、どんな風貌だったかまでは分からないし、覚えていないが。

(可愛いかなんだか知らないが、尻の形までは俺の責任じゃないんだからな)

心の中でぼやきながら、タコスを軽く温め、その間にレタスを刻み、カウンターの下の冷蔵庫から、作り置きサルサを出してくる。具材を挟んで皿にのせれば、出来上がりだ。ボックス席に持って行く前に、カウンターの客のオーダーを聞き、飲み物を出して、カウンターを出る。

席に向かい、低くなったテーブルに皿を置くのに屈んだ所、案の定、ジョージが触れてくる。

「あんたな・・・いい加減にしろよ。セクハラで訴えるぞ、全く」

「すまんすまん」 声は言葉とは裏腹に、笑っている。

「なあ、あんた付き合ってる相手いるんだって？ 俺よりいい男か？」

「俺には、いい男だよ」 エディはにやりと笑ってみせた。

「俺に乗り換えろよ」

「いやだ」

ジョージのにやにや顔に、真顔でぴしゃりと言い放ち、エディは席を離れた。

今日はドンがまだ来ていない。彼が来れば、少しはジョージもおとなしくなるのではないか。エディは、店長の早い到着を、はじめて強く願った。

「ジェレミー」

ジェレミーのアパートである。2人とも自宅に食洗機などないので、2人で後片付けの洗い物の最中に、思い立ってエディは声をかけた。

「どうした？」

「昔、俺に一目惚れしたって言ってくれたよね？」

「言ったよ。あのカフェで見られてるって分かって、見た時にね」

「じゃあ、俺が座ってる時だったんだ」

では、ジョージのように尻にこだわった訳ではないのだろう。

「何？ 座ってるとか立ってるとか、関係あるのか？ 俺は、エディの目が印象的だったんだけど」

「そうか・・・」

濡れた手をタオルで拭い、先に座ったジェレミーの隣に腰を下ろす。

「客の1人がね・・・」

エディは、ジョージのことをジェレミーに説明した。

「そりゃ今までだって俺の尻を褒めてナンパしてくる奴はいたんだけど、店の常連ていうのが、ちょっと面倒なんだよな」

そう言って、ジェレミーの分厚い肩に背中からもたれる。そのエディの頭を自身の胸元で受け止め、腕をエディの胸元にかけて。やや大きな無骨な手が、エディが肉付きの薄さを嘆く胸を優しく撫でる。掌の温かさが、白いコットンシャツを通して感じられ、心地よさにエディは吐息を漏らした。

「ドンに相談してみろよ」

「まあ、言ってはいるんだけど・・・いない時に来るのが、さ」

「今度、俺も『バット・マン』の偵察に行こうかな。俺のが終わるの少し早いんだし。エディの休みを俺と合わせてくれてるんだし、売上協力ぐらい、多少はすべきか」

くくっとジェレミーが笑う。

「付き合ってる相手がいるって、証明出来るからちょうどいいよ」

「店でいちゃいちゃしたら、ドンが怒るかな」 ジェレミーの言葉に対して、エディは上目遣いで、彼を見た。返って来たのは、笑顔だけだった。

エディは、自分の胸元にあるジェレミーの手を掴み、節の目立つ中指に唇を添え、舌でそっと指先までをなぞった。指先までたどり着いた時、そのまま指をくわえた。ゆっくりと、深く浅く、しゃぶる。ジェレミーの息が、少しずつ荒くなっていくのを、エディは感じていた。その彼を挑発するように、ジェレミーの顔を見つめたまま、唇を、そして舌を動かし続けた。

「たまに、エディからそうやって誘ってくれるのは、新鮮だな」

エディは返事をする事は、叶わなかった。

ジェレミーは毛布の中に潜り込んでいて、何をしているかエディには見えない。覗き込もうにも、興が乗ったジェレミーに、両手をバンダナで手錠のように縛られてしまっていて、動かすことができなかった。

軽く立てて開かれた膝の間にジェレミーの頭があることだけは、時折感じる彼の呼気で分かるが、彼の次の行動が見えない。今は彼の唇が鼠径部近くを彷徨っていた。肝心な所に触れそうで触れない動きに焦らされ、思わず腰が動いてしまう。

と、両脚を支えていた手の片方が外れ、ナンパの度に褒められる尻の肉を軽く掴んだ。その筋肉の弾力を楽しんでいるのか、マッサージでもするかのように、やわやわと揉んでいる。

「あ・・・！」

鼠径部にいた唇が急に先端に口づけた。暖かく柔らかい感触に包まれ、エディは思わず声が漏れた。その動きはまるで、ジェレミーが指にされたことをなぞるかのように、浅く、深くくわえて、エディが堪えきれず漏らす声を楽しんでいるようだった。尻に回っていた手も、マッサージに飽きたのか、その奥へと指が入り込む。入り口の辺りで逡巡するような動きをみせたが、まもなく、ゆっくりと更に奥へと入り込んできた。

中で蠢く指が、更にエディの息を荒げさせる。手の自由が効かないことで、上体は、打ち上げられた魚のように跳ねた。

「ジェレミー・・・もう」

声を堪えることで、更にエディの息は荒くなっていた。自分の目はきつと潤んでいるに違いない、とこんな時にすら、妙に冷静に考える自分を滑稽だと感じながらも、声を漏らし続けた。

「もう、本当に・・・だめ・・・だ！」

何かジェレミーが喋ったようだったが、毛布越しで、舌を動かしながらのようで、何といったのか分からなかった。その間にもエディは追い立てられ、足先に力が入るのが分かった。

「ああっ・・・！」

ジェレミーは口を離さなかった。エディは体をよじったが、穿たれた小さな杭と下肢を押しえつける腕のせいで、思ったように動けない。刺さった小さな杭はまだ蠢き続け、今いったばかりだというのに、エディの体に新たな火を灯す。

エディの体に点った火を確認したかのように、毛布からジェレミーが顔を出した。

「たまには、こういうのもいいだろ」

「何言ってるんだよ・・・」 微笑んで、ジェレミーに唇を近づける。軽く合わさっただけで離すと、やっとジェレミーはエディの戒めを解いた。

「でも、やっぱり抱き合ってる方がいいな」

笑うジェレミーを導くように、エディは背中を向けて、彼が後ろから抱きしめられるように、もたれかかった。

「後ろから抱きしめられると、なんか最近安心するんだ」

「おとなしくならなくなるくせに」

「馬鹿」

背後から、さっきよりも遥かに大きな杭が穿たれる。エディは安心と、快樂の入り混じった吐息を漏らした。



どうせ『バット・マン』の様子を伺いに来るなら、確実に店に来そうな日を狙おう、とエディはジェレミーと話していた。毎日来るわけではないが、休みの前日なら、確実にやってくる。

「火曜日なら、閉店の1時間前あたりに確実にいるよ」

「それなら、俺が店終わってから行っても間に合うな」

「待ってるよ」

予め示し合わせたので、今日はジェレミーが様子を見にやって来る。そう思うだけで、エディは少し安心していた。ドンに話してはあるが、言葉で注意するぐらいしか出来ない。かと言ってジェレミーが何らかの実力行使に出るわけではないが、自分が付き合っている相手だから、と出ていけば、少なくとも尻へのいたずらは止むだろう、という読みだった。

果たして、『バット・マン』はやって来た。

「よお、ブラック・アンド・ホワイト」

ジョージの挨拶にも、エディは手を軽く挙げただけで答えた。今日は幸か不幸か店はさほど混み合っていなかった。ジョージはまっすぐ奥のソファの席に向かった。

「テキーラ、ロックね」

黙ってうなずき、すぐに飲み物を持って行こうとして、手を止める。今行けば、かなりの確率で、『バット・マン』は尻を触るなり掴むなりしてくるだろう。出来れば、このタイミングでジェレミーが来ないだろうか。

一旦エディはグラスから氷を出して、扉の方を見た。しかし扉が開く様子はない。

エディは軽くため息をついて氷を入れ直し、カウンターを出た。席に近づくと、ジョージの手のリーチを考え、及び腰のまま、そっとテーブルにグラスを置いた。

「なんだ。何、警戒してんだよ」

「自分の尻を守ってるの」

「なんだよ、人を変態野郎扱いして」

「毎回尻を撫でられたり、掴まれたりしたくないからな」

立ち上がりながら、もう1度扉の方を見る。ゆっくりと扉は開き、『待ち人』はやって来た。

入って来たジェレミーは、並んだスツールの後ろの通路を真っ直ぐエディに向かって歩いてきた。「来たよ。遅かったかな？」

両手を広げた所にゆっくりとエディは歩み寄り、ハグを交わす。体を離そうとしたが、ジェレミーがそれを許さなかった。顎を指ですくわれ、キスされる。挨拶だけの短いものではなかった。舌こそからめないが、自分達の間を周囲に見せびらかそうとするようなものだった。恐らくは、『バット・マン』に見せるのが目的なのだろう。

気が済んだのか、数秒後、ジェレミーはやっとエディを解放した。

「『バット・マン』は来てる？」

「奥のソファに座ってるよ」 顎を軽くあげて、エディは奥を示す。ジョージは、半ば笑いながらこちらを見ている。恐らく、このジェレミーがエディの相手だというのは、分かっただろう。これで、せめて尻を触ってくるのも収まればよいが。

カウンターに座ったジェレミーは、店が暇なのをいいことに、カウンターの中のエディとおしゃべりを楽しみ、時折、奥のジョージの様子をちらりと見ている。明らかに、ジョージに対する牽

制だった。

再び、ジョージがエディを呼んだ。エディは、ジェレミーとアイ・コンタクトを取り、笑い合う。

「おかわり？」

「あれが、お前の相手？」

「ジェレミー？そうだけど」

「俺に乗り換えろよ。俺のがいい男だ」

「余計なお世話だよ。飲み物は？」

「ああ、またテキーラを」

うなずいて、すぐに席を離れる。尻の事に触れず、触っても来なかったのは、ジェレミーがいたからだろうか。それとも、今日はまだ酔っ払っていないからだろうか。

エディがカウンターの中に戻ると、ジェレミーが入れ替わりに立ち上がった。まさか、と思いつつ、声を掛ける。

「ジェレミー、荒立てるようなことは・・・」

「分かってるよ。『挨拶』だけだって」 ニヤリと笑う。

目線で様子を伺いつつ、すぐにお代わりを作り、席に向かう。

「面倒な事は、やめてくれよ」 ジェレミーにそっと耳打ちする。

「違うよ。俺のパートナーだから、余計なちょっかい出さないでくれって伝えるだけだよ」

ジェレミーの口調は、穏やかだった。

ジェレミーは、ゆっくりと奥の席に歩み寄った。

「で、あんたもエディから聞いているだろうけど、見ての通りだから、あんまりちょっかい出すのは止めてもらえないかな」

「それはそれで、頭に入れとこう。ただ、俺が口説いてエディがなびいたら、それは別の話だろ？」

エディもやって来て、ジェレミーの隣に立った。

「俺に、その気はないから」

エディは自分の声が呆れているのに気付いていた。

「気に入った奴がいたら、口説くのは、俺の趣味みたいなもんだから、気にしないでくれ」

「とりあえず、尻に触らないでいてくれたらいいよ。断るのは俺の特技なんだ」

ニヤリと笑ってみせ、ジェレミーの腰を抱いて、エディはカウンターに戻った。

「たまに偵察に寄るのもいいかもな。『バット・マン』を牽制するためにも」

「喧嘩とかにならなきゃ、また来てもいいよ。あんたも売上協力してくれるんなら」

カウンター越しに、2人は笑いあった。

先に帰ったジェレミーのアパートを訪れ、ドアが開くと、出て来たジェレミーに腕を掴まれたと同時に抱きすくまれた。身動き出来なくなった所を唇がふさがれる。

舌はからめとられ、気が済むまで暴れまわると、舌先が口蓋を優しく撫でるように動く。背筋を走る感覚に、腰が砕けそうになる。

互いに相手のシャツを脱がせつつ、ベッドルームに向かう。脚がマットにぶつかると、そのまま倒れこむ。身に付けているものは、慌ただしく脱いでしまった。

再び抱き合うと、ジェレミーの唇はエディの首筋をたどり、薄赤い跡を残して胸元へ下がっていった。2つの小さな突起の傍まで来ると、赤い舌先が顔を出し、突起を囲む小さな輪の周りをゆっくりなぞった。エディの肌が粟立つと同時に、こらえきれない声を含んだ吐息が漏れる。

唇が輪も含めて口付け、突起も共に口に含む。エディの手の片方が、ジェレミーの下肢へ伸びた、既に熱を帯びて固くなったそれを愛おしげに握り、指先で雫を溢しそうな先端を撫でる。

忙しげにジェレミーの唇がエディの体を下がり、両脚を抱え上げる。くわえ込み、唇をすぼめ、エディの反応を見る。のたうつエディの体を見て、舌なめずりをする。再び口に入れ、再び反応を見ながら、作業を再開する。エディを頂点まで追い込むための。

いきそうになれば、動きを止め、少し収まれば、再開する。肝心な所で止められる歯がゆさでいやいやを言うように、エディが頭を振るが、ジェレミーは止めなかった。指先が、双丘のあわいをさまよい、入るべき所を見つけて、潜り込む。エディの体が跳ね上がった。

「ジェレミー・・・」 エディが切なげな声をあげて、ジェレミーの方を見るが、懇願とも思える声は無視され、指が更にうごめくだけだった。

「エディ・・・俺のだ、渡さない・・・」

荒い息と共に吐き出されたジェレミーの言葉は、ジョージへの嫉妬だろう。この激しさも、そのせいだというのか。

更にエディの両脚が抱え上げられ、唇がふさがれる。続いて挿入された熱い塊は、ふさがれていながらも、エディの唇から、小さなうめき声をあげさせた。

細く、普段よりもやや高いあえぎが、間断なくエディの口から漏れる。何度となくジェレミーに唇をふさがれ、彼も荒い息の下、我慢しきれないかのように声をもらす。

「あの男の所なんか・・・絶対行くなよ」

「あんたがいれば・・・どうでもいいよ・・・」

やはり、珍しいジェレミーの荒々しさは、ジョージへの嫉妬だったのだ。エディは激しくなるジェレミーの動きを受け止めながら、体が暖かくなるのを感じたが、それだけでない熱さが、体を支配していた。額に汗がにじむ。

「ああ、ジェレミー・・・」

切迫した声と、パートナーを呼ぶ声が、何度となく口をついて出る。その声も、徐々に言葉にならない声に変わっていく。やがて、それは忙しない切迫したものに変わり、一際大きく声を上げた時、耳元で、ジェレミーが囁く声が聞こえた。

「愛してるよ、エディ・・・」

明日は、待望の休日だった。

ドンの配慮で、エディの休日はジェレミーに合わせて貰っている。当然、他の日にドンが休むので、1人で店を回さなければならない日があり、そうして年末とクリスマス以外の無休営業を保っている。

せっかくの休みなものだから、有意義に使いたい、と思っているのは、エディもジェレミーも同様だった。普段の日に話していた映画を見に行く事や、美術館に興味のある展示を見に行ったりして過ごし、残った時間は2人で買い物に。そして、早い時間から2人で夕食を一緒に作って、のんびりするのが定番だった。もちろん、たまには、予め買い物を済ませておいて、1日ぐうたらに過ごす決めて、のんびりする事も。明日は、そういう日だった。その為に、普段の日にジェレミーのアパートを訪れた際、沢山の作り置きをして冷凍しておいたのだ。

その予定を考えるとエディは、早く終わりたい、と思うのと同時に、その予定があるからこそ、今日は少しは頑張れる、とも思う。

今日はバット・マンは来ないな、と安心していると、珍しく遅い時間に彼はやって来た。

「テキーラ？」

混み合っている店に入って来たジョージに聞く。黙ってジョージはうなずき、混み合ったカウンターに空いた席を見つけて座った。再び、ドアが開くカウベルが鳴り、エディは振り向く。

「ジェレミー・・・」

「一緒に帰ろうかと思って」

彼のいつもの『ビッグスマイル』が返って来た。この前に会った時は何も言っていなかったが、やはりまだ、心配で見張りに来たのかも知れない。ジョージのすぐ傍が空いていたが、敢えて、少し離れた席に座った。

「コロナ？」

「いや、今日はタンカレー。ロックで」

エディが好んで飲んでいたものを、ジェレミーはオーダーした。2人で飲む時に、ジェレミーもたまに飲んでいたので、親しんだ味になってしまったのだろう。

「ブラック・アンド・ホワイト、今の彼氏には、まだ飽きないか？」 ジョージが口を開いた。

「まだまだ探求の必要性が感じられるんでね」

エディも負けずに、ジョージの顔も見ずに答える。手を休められるほどに、暇でもないのだ。ジョージの前にグラスを置くと、続いてジェレミーの前に透明の液体の入ったグラスを出す。と、その手がジェレミーに掴まれた。

「ジェレミー？」

「ずっと思ってたけど、一緒に住まないか？ 新しくアパート借りて。1人で放っておくのが不安なんだ。もう1つ、首輪を付けさせてくれないか？」

首輪。この店を紹介したのはジェレミーだった。まだ、エディが亡くなった恋人の死に囚われていた時、自分のだと名札や首輪を付けたい、とジェレミーは言った。放っておくと、どこかへ行ってしまいそうで不安だから、と。

エディは、その時の事を忘れたことはなかった。

カウンター越しに腕を伸ばして、ジェレミーの首をかき抱いた。そのまま、返事の代わりに、ジ

エレミーにそっと口付ける。ジェレミーの腕もまた、エディを引き寄せ、深く唇を重ねる。そしてそのまま数秒。周囲から何人もの指笛が飛んだ。

顔を離れた時、視界にジョージが目に入った。彼は苦笑していた。

「バットマ・・・いや、ジョージか。礼を言わなきゃな。あんたの事がなけりゃ、言い出すのも、俺はもっと迷ってたろう」

ジェレミーは、エディに向けたビッグスマイルをジョージにも向ける。エディは思わず噴き出した。「俺からも礼を言うよ」 ジェレミーに続いたエディの声も笑っていた。

「まったく、人を当て馬に使いやがって。ありがたいて言うなら、暫くタダで飲ませろよ」

「今日は俺が奢るよ。 エディ、俺につけといてくれ」

「オーケー。 なあ、ジョージ。 このジェレミーは、珍しくも、俺の尻見て口説いて来たんじゃない人間なんだよ」 エディは、まだ笑っていた。

「一目惚れから、何ヶ月もかかって見つけて口説き落としただから、そう簡単には渡さないよ。

悪いけど、諦めてくれよ。 可愛いお尻の持ち主なら、また見つかるって」

「人をまた尻、尻って・・・」

「いつも俺の尻に触って、尻がいいってばっか言ってるからだろ」

「まあ、いいや。 そいつに飽きたら、いつでも言ってくれ。 俺は気が長いんだ」

これからは尻に触られずに済みそうだが、それでも口説いて来るのは、これからも続くのかもしれない。しかし、今後それもなくなってしまうと、少し寂しいかもしれない、とエディがこっそり思ったのは、ジェレミーの知るどころではなかった。